

(1) 322

[研究ノート]

## ある英国人仏文学者が 青年時代に見た終戦直後の日本

奥村みさ

### 1. はじめに

本稿はあるイギリス人が語った第二次世界大戦後の日本進駐体験のオーラル・ヒストリーである。語り手であるイギリス人フランス文学者マイケル・スクリーチ氏 (Michael Screech, 1926 ~、以下敬称略) は、大学生で召集され英国情報部で日本語を習い、1946-47 年に BCOF 英連邦「進駐軍」<sup>(1)</sup>の一員として日本に駐留した経験を中心に、そのときの印象深い諸経験が彼のその後の思想形成、学問研究に大きな影響を与えたことについても語っている。

### 2. 語り手の略歴と本稿作成の経緯

#### (1) 語り手の略歴

マイケル・スクリーチは 1926 年生まれ。現在オックスフォード大学オール・ソールズ・コレッジ・エメリタス・フェロー。1943 年にロンドン大学ユニバーシティ・コレッジ (以下、UCL) に入学。在学中に召集され 1944 年から 47 年まで軍務につく。英国情報部で日本語を習い、日本軍の暗号解読・電文傍受の訓練を受けた後、BCOF の一員として呉市と鳥取

市に1946年から47年の2年間進駐。本稿では当時の経験を語っている。

戦後はフランスのソルボンヌ大学に戦後初のイギリス人給費留学生として留学。UCLで文学博士号(D. Litt.)取得後はバーミンガム大学を経て母校のUCLにて教鞭をとった。専門はフランス中世ルネサンス期文学である。特にフランソワ・ラブレー、ミシェル・モンテーニュ、デジテリウス・エラスムスの研究者としても知られ、1981年英国学士院会員、その後王立文芸協会会員に選出された。世界的にもその業績は高く評価され、1992年にはフランスからレジオン・ド・ヌール勲章シュバリエの位階を贈られている。大学退職後はイギリス国教会の牧師の資格を取り、1994年に叙階された。

## (2) 聞き取り日時・場所・方法

2010年7月6日と9月15日、そして2011年2月21日の3回に渡り、聞き手がスクリーチの自宅を訪問した。初回は約2時間、2回目約4時間の聞き取りを実施し、3回目は原稿の下書きの内容の確認を中心に約3時間半、話を聞いた。

スクリーチの自宅のあるホワイトチャーチ・オン・テムズ村はその名の通りテムズ川沿いの小さな村である。オックスフォードとロンドンとの間に位置する村であり、農場と住宅地が混在している。『楽しい川べ』(*The Wind in the Willows*)の作者ケネス・グラハムはここに居を構え、作品を書いた。そのような村で初回は柳の緑の美しい夏の日に戸外で、2回目と3回目は書斎で話を聞いた。随時、家族も加わり、昼食も挟んでリラックスした雰囲気では話を聞いたことも、氏が率直な姿勢で聞き取りに臨んでいる要因と考える。

聞き取りはすべて英語で実施された。本稿はそれを聞き手が日本語に翻訳したものである。但し日本語の太字イタリック体で記した部分は、日本語でスクリーチが話した言葉をそのまま採録した。なお、日本語の下書き

はスクリーチと次男のタイモン・スクリーチ（ロンドン大学アジア・アフリカ研究院（=SOAS<sup>(2)</sup>）教授、江戸美術史）に内容を確認してもらった。

### 3. マイケル・スクリーチのオーラル・ヒストリー （1943 年 - 47 年を中心に）

#### （1）プリマス生まれ

私は 1926 年、プリマス<sup>(3)</sup>生まれです。プリマスは港町でして、昔から世界に開かれた開放的な雰囲気があります。ドレイクがスペインの無敵艦隊を破って帰還した港です。ですから 15-16 世紀のヨーロッパ史には子供のころから親しんでいました。

私の大好きだった叔父は海軍の軍人で、日英同盟のころに日本の海軍の軍人と電話で話したことがある、と言っていました。当時は電話での通信も珍しかったのですね。

父は警察官でした。第一次世界大戦に従軍しました。その時代の人によくあることですが、大変な読書家でいつも本を読んでいた。両親ともフランス文学・文化が好きで、私は 10 歳からフランス語を学びました。14 歳のとき、ダンケルク<sup>(4)</sup>からプリマスに撤退してきたフランス兵の通訳をしたこともあります。UCL ではフランス文学を専攻したのも自然な成り行きでした。

#### （2）日本との出会いは突然に

##### 1) 英国情報部の日本語コース

とにかく当時はわけもわからず、突然、日本語を勉強することになったのですよ。

シンガポールが 1943 年に陥落し、英国の戦況が悪くなって初めて、日本語の暗号解読ができる人材不足が問題になってきました。当時はプレッ

チリー・パーク<sup>(5)</sup>で暗号解読が行われていましたが、主力はドイツ軍のエニグマの解読でした。最初は数学者によって暗号解読はされていたようですが、これは言語に強い人間がなくては、ということになったようです (Hinsley & Stripp 1993, Smith 2000, McKay 2010)。

今日でも SOAS においてさえ日本語を習得するには3年かかるそうですが、私たちの日本語教師オズワルド・タック大佐は「しかるべき素質のある人を集めることができれば、6か月で日本語をマスターさせる」といったそうです。そして、そのとおりにしました。

彼は当時、制服組では最年長だったのではないのでしょうか。大変に日本語に堪能で独自の漢字学習法を開発し、それを私達に学ばせたのです (Jarvis 2005)。その方法については後で話します。

1943年、私はUCLに入学しました。翌1944年にはザ・キングス・ロイヤル・ライフルズに召集されました。その後、突然、語学の「特別試験」をするから、ということと呼び出され、何語の試験かとか、何の目的で、ということもまったく知られずに試験を受けさせられたのです。「受験者」は新旧両方の言語に秀でた学生から大学教授まで、という条件だったそうです。古い言語というのはラテン語かギリシャ語のうちどちらか、そして新しい言語というのはフランス語かドイツ語かうちのひとつでした。

いまでも覚えていますが、試験用紙には日本語の文章がローマ字で12文ありました。まったく意味のわからない言葉でしたが、部分部分が違って、そこから内容を推察せよ、という問題でした。

*Tekikoku gunki sanki gekitsui seri* (敵国軍機 三機 撃墜セリ)

*Tekikoku gunki yonki gekitsui seri* (敵国軍機 四機 撃墜セリ)

というような文章が並んでいました。もし語学の素養があれば、「三機」と「四機」が何を言っているのか、想像することができるはずです。以下のような文章もありました。

*Tekikoku gunkan sankan gekichin seri* (敵国軍艦 三艦 撃沈セリ)

*Tekikoku gunkan yonkan gekichin seri* (敵国軍艦 四艦 撃沈セリ)

私は試験に通ったようです。次の日から「語学合宿」に参加させられました。情報部隊<sup>(6)</sup>に異動させられ 1947 年の除隊までその部隊に所属しました。語学合宿はベッドフォード<sup>(7)</sup>というところで、日本語の 6 カ月集中コースを受けさせられたのです。コースの最終段階ではそこで秘密裏に今後我々にどのような働きが期待されているのかを知らされました。

毎日朝 6 時半に起き、少し走った後、しっかり朝食をとり、午後 1 時までタック大佐とみっちり日本語の勉強です。昼食後 30 分休憩。その後また勉強。夕方にはいくつかの漢字を習いました。（覚えるべき）漢字が選択されていたら、驚くほど覚えられるものです。

でも困ったのは当時はきちんとした教科書や辞書の種類も限られていたことです。ローズ・イネスの辞書を主に使用していましたね<sup>(8)</sup>。

漢字を学ぶのはとても難しかった。というのも、現代語の辞書がなかったからです。「大字典」も時々調べましたが、これは私達にとって途方もない作業でした。

タック大佐は、海軍における日本語学習にとって、最も大事なことは書き言葉の読解力であり、特に漢字学習が重要であることを力説していました。そして海軍にとって必要な漢字に特化して集中的に勉強させたのです。日本の戦艦の名前、地名、海軍用語など。

彼はまず漢字をまとめた意味のかたまりとして教えました。個々の漢字の読みにこだわらず、熟字ごとに教えるのです。たとえば「撃沈」、「降伏」、「急降下爆撃機」とセットで覚ええました。セットごとに意味を教えてくださいました。そのあとで、熟字を分解して、一つずつの漢字の意味も教えてくださいました。「急」「降」「下」。そのようなわけで漢字は日本語学習の障害ではなく助けとなりました。

主に既に傍受された日本軍のラジオや電文で練習しました。一年前のものから最近のものまで。日本のラジオは「センキョー、　　ホーメン、ワ

ガブタイワー」といつも同じ言葉で始まりましたし、多くは言葉の繰り返しが多かったので、量をこなすにつれて簡単にわかるようになってきました。日本軍はおそらく西洋人には日本語が読めないと思ったのでしょう。日本語をそのまま使用したものが多かったので、アルファベットをランダムに組み合わせたドイツ軍の暗号よりもずっと解読しやすかった。

「大本営発表」の悲劇は（事実を伝えなかったので）まったく無意味だったことです。日本人は戦況の現実を知らされるべきでした。（うその情報で）どれだけの人々がなくなったか。日本軍の発表を聞く限り、戦争末期、（連合軍は）日本軍の船を数隻しか撃沈できなかったのかと思ったら、予想以上に撃沈していました。

あなたがもしタック大佐について書く機会があったら、強調してほしいことがあります。彼は日本について同情的に公平な立場から日本人や日本文化について語らなかつたことはありませんでした。まったく反日的のプロパガンダはなかつたのです。彼はどのような政治的勢力が日本を開戦に導いてしまったのか、はつきりと認識していました。彼は日本の帝国海軍に対して深い敬意を持っており、真珠湾攻撃が宣戦布告なしに行われたことには大変驚いていました。帝国陸軍に対してはそれほど好意を持っていませんでした。しかし繰り返しますが、授業では批判するようなことはありませんでした。

彼の指導のもとでは、私達は「勤勉で伶俐な才能ある人々、だが当時の指導者たちが非倫理的で最終的には悲惨な結果をもたらすような決断をしてしまった人々」と対峙しているのだと理解していました。

いよいよ真剣に電報解読に取り組み始めたころ、そして、いまならしませんでしたが当時は若かつたのですね、ビルマの最前線に志願しました。その後には日本は降伏。私はサシチョウバエ熱で重病となり、ヒマラヤ山麓のシムラーに送られ、カラチへ。そしてボンベイから日本へ出発したのです。583FSS (583 [British/Indian] Field Security Service) に配属され BCOF

の最初の部隊として送られました。始めは呉市に配属され、後に鳥取市（1946年3月 - 6月）へ移動。そこでは木造の設備の整った一軒家に本部を置きました。1947年8月インド・パキスタンが独立した後は904 [British] FSS に異動しました。

## 2) 日本人捕虜との会話

1945年にまずインドに送られました。当時、日本軍の電報を傍受して解読することは主にデリーで行われていました。今でもよく覚えています。が、戦後最初に解読した電文は仏領アルジェの日本人からリスボンに送られたものでした。既に解読された電文を練習用に使用したものです。それが「ジレット ノ 替刃 オクレ」。それで「ああ、平和になったんだなあ」と実感しました。

インド滞在中に父が送ってくれた本の中にラブレー全集があったのが、ラブレーとの出会いでした。おもしろくて夢中で読みました。

当時イギリス「情報部隊」で日本語ができる人材は本当に少数でしたので、私は捕虜になった日本人と話す機会ができました。気晴らしに連れ出し、アイスクリームを奢ったり。

そのなかでとても印象的だった若者がいます。彼は暗号解読の専門家のひとりだった。絶対に名前を明かさないと誓って「戦争前は何をしていたの?」と聞いてみました。

するとフランス語の勉強をしていたと。私達はすぐにフランス語で会話しました。彼の大好きな映画女優はダニエル・ダリユー。私も大好きです。ラブレーを渡辺一夫の和訳で読んでいると言うじゃありませんか。私もちょうどトマス・ウルクハルトの英訳で読んでいたところでした。私達は共通の話題を見つけ、すっかり打ち解けいろいろと話しました。

彼がインドで捕虜になって驚いたのは、BCOF が武装していないことだったといいます。

### (3) 日本の降伏

私は海外派遣前に許可される休暇がちょうどドイツの降伏と重なり、VE Day はトラファルガー広場で喜びに沸く群衆の中で迎えることができました。フランスに行って仕事をすれば中尉にしてやると言われましたが、私は断固として日本に行くことを主張しました。せっかく日本語を学んだのですから、日本に行ってみたかった。当時のイギリスでは一般人には日本という国はほとんど知られていませんでしたし、当時は自費で遠い日本へ旅行するなどとても無理だと思いましたので。フランスは将来いつでも行ける。

とにかく戦争は終わった。印象的だったのは、日本が降伏文書に署名する時にアメリカの戦艦ミズーリ号上に軍人だけでなく、モーニングをきちんと着た日本の民間人が何人も出席していたことです。片や軍服で気楽な態度のアメリカ人、片や外交辞令に則り盛装した日本人。その姿に彼らの誇りを見ました。日本人は誇りを失いませんでした。

次に来たのは貧しくつらい時代でした。本当に日本は徹底的に打ちのめされてしまいました。このようなことをいうのもおかしいかもしれませんが、あまりの完敗にそこには恥ずかしいというような雰囲気はなく、むしろ「よし、負けた、さあ復興しよう」という希望に満ちた空気がありました(ダワ、2004: 204 等)。街には活気があり人々はとてもよく笑い、私達に大変親切にしてくれました。嫌な思いをしたことはほとんどありません。

だけど戦後の日本はとてもつらい時期でした。特に女性には大変な時代だった。イギリスはドイツに主要な都市をみんな爆撃されました。戦争で本当に気の毒なのは女性たちです。日本の女性たちは本当に深刻な被害を受けました。彼女たちは父親、夫、息子を亡くしたのです。

(当時のアルバムを見せながら) ここの写真がはがされているでしょう。これはこの女性が持っていったものです。子供を映した写真だったのです



よ。ここね、このところ。彼女は貧しさのあまり子供を売らなくてはいけなかった。それほど日本は貧しかったのですね。苦しい時代でした。

ある時私はなぜそこにいたのかわかりませんが、丘の上を歩いていました。すると赤ちゃんを抱いた女性がよろめきながら歩いていました。私は赤ちゃんを抱いてあげて「家はどこですか」と。一緒に歩いて行ったらトタンが地面に置いてある。なんと彼女の「家」はその下の土の穴倉だったのです。

今の日本では考えられないでしょう。それほど社会は戦争で疲弊していました。もちろん日本政府は自国民に対して何とかしたかったでしょうが、十分な財政もなかった時代です。

食べるものがない。日本は飢えていました。今のあなた方には想像もつかないでしょうね。交通機関だって電車しか動いていなかったです。私達はジープと小さなローリー（トラック）を持っていたので、お寺のご住職や私達の秘書（夫はヒロシマで死亡）の弟など知り合いにずいぶんと米など差し入れたりもしました。特に親しい人にはウィスキーとかオーストラリア産の高級ビールとかも。敵意を感じたことは一度もありません。いつも丁寧にお礼を言われました。「オーストラリア軍の配給のほうが、イギリス軍の配給よりもずっと質がいい」と冗談を言われたことさえありましたよ（笑）。

呉は明治時代から海軍の基地があったところです。日本はイギリス海軍をモデルとして近代的な海軍を編成しましたから、戦前から親英的土地柄で友好的の雰囲気があったことが私達には幸いしたのだと思います。1902年に日英同盟が締結されたことを覚えている人々もいました。

キリスト教団体も活動していましたが、それでもあまり十分な食料が行きわたっていませんでした。当時は戦争に対する絶対的な拒絶がありました。今よりもずっとずっと。今はどこか戦争をロマンチックに見てしまっている側面があるのも怖いと思います。

#### (4) たった 2 名の進駐軍

日本は戦争直後、「**連合軍政府** (Allied Military Government)」の管理下にはありました。日本ではしばしば「**米軍政府**」と語訳しますが、ふたつ強調したいことがあります。第一に、AMG の A はアメリカではなく、Allied つまり連合軍という意味です。日本ではよく誤解されているようですが「**米軍政府**」ではなく「**連合軍政府**」です。東日本はアメリカ軍が中心になったものの、西日本はBCOF が主に担当しました。

第二に、戦後は AMG の管理下にはありましたが、日本では独自の政府が機能していましたし、日本の地方は自治体政府を持ち、警察権も日本人が持っていた、ということです。ですので、私としては少なくともBCOF を「**イギリス連邦占領軍**」ではなく「**イギリス連邦進駐軍**」と訳したいと思います。BCOF は担当地区を実際に「占領」したことはなかったのですから。

BCOF は呉市に本部を置くことになりました。私の主な仕事は治安、抵抗勢力の警戒、ということでしたが、実際にはほとんどそのような仕事はなく、私は日本語が話せたので、土地の人たちと積極的に交流しました。

多くのイギリス人やオーストラリア人は「呉 (Kure)」を「くれ」とは発音できずに「キュウリィ」と発音しちゃう。すると英語がわからない親切な土地の人たちは、にこにこして胡瓜を持ってきてくれる。胡瓜だらけになった (笑)。

呉市は軍港で軍艦を建造していたこともあり、海軍となじみの深い土地柄でした。そして昔からおおむねイギリスには好意的な雰囲気がありました。周知のとおり、日本の海軍はイギリス海軍をモデルに設置され、特に1901 年日英同盟の頃は留学生も多かったのです。

私はその後、私にはオーストラリア人の直属の部下 F.W.伍長が付き、鳥取に配属となりました。伍長はその後日本に止まり、東京で非常に有名な成功した実業家になりました。

私たちは 20 代の若造でしたが、たった 2 人の BCOF でした。当時の日本政府は財政難で節約のため、外国人が同席する時以外はパーティを開けなかった。そこで私達を招待することは宴を開く格好の理由となり、あちらこちらに呼ばれましたね。ただの軍曹なのに、県会議員や議長、知事などと同席するという名誉にも与りました。

戦争が終わった直後の日本人には恐怖があったのだと思います。ビルマ戦線での様子などが徐々に開示されて一般人の知るところとなり、イギリス軍が来たら復讐されるのではないかと思っただろう。その時聞いたのは、BCOF が来る前に「蒋介石が来て鳥取を占領する」という噂があり、中国での日本軍による民間人虐殺の復讐をしにくるのだ、とまことしやかに恐れられていたらしい。ところが、我々はまったく武装しておらず、しかも鳥取市には若造が 2 人。きっと拍子抜けしたのではないのでしょうか。

（神妙な顔で）これだけは書いておいてほしいのです。私は絶対に日本人に対して乱暴な態度をとりませんでした。そのように努力しました。御遺骨が帰ってきたときには、私はそのたびごとにできるだけ丁寧にきちんと敬礼しました。そのときは緊張しましたね。やはり迎える人たちは自分たちの父親、夫、息子、恋人、家族を亡くしたのですから。最大限の敬意を払いたかったのです。私達もドイツ軍に爆撃されました。遺族の気持ちはよくわかりました。

鳥取県には戦中 1943 年に地震が襲い大きな被害を受けていました<sup>(9)</sup>。私が呉に滞在した時には巷ではヒロシマの話で持ちきりでしたが、鳥取では震災の話が中心でヒロシマのことはほとんど聞きませんでした。おそらく情報がいっていなかったのでしょう。

#### (5) 「スクリーチ軍曹」

##### 1) 地域の人々との交流

大部分の BCOF 兵士、それも高い階級の兵士であっても日本政府当局

と直接に接触を持った人はほとんどいませんでした。兵士は自分の直属の部隊のことしか知らなかったのです。軍はそうのように情報を管理しました。「知らなくてよいことは教えない」。

しかし私達 FSS は呉市警察とは毎日、呉市役所、呉市長、そして広島県知事とも頻繁に直接の接触がありました。そして私が最も日本語が流暢でしたので、私が日常レベルで一番近しく彼らと接していました。私があちらを訪問することもあれば、あちらから私のほうへ訪ねてくることもありました。土地の人たちからは「スクリーチ軍曹、スクリーチ軍曹」と呼ばれました。あまりそう呼ばれるので、私の (BCOF の) 同僚たちは、よく私をからかって *Sukurichi Gunsou* と日本語風に (à la Japonaise) 呼んだものです。子供たちからは「進駐軍のおじちゃん」とも。ほら、この写真ね。子供たちは本当にかわかった。

街の中を歩きながら人々と会話したり、仲良くなった人の自宅に食事に招かれたりしました。この写真に写っている弁護士の H さんのお宅には何度も遊びに行きました。ここに掛けてある錦絵や、その掛け軸も彼にいただいたものです。

鳥取では大きな家で我々 2 人のために 12 名の使用人がつきました。できるだけ多くの日本人を (彼らの) 生活費のために雇うことが重要でした。学校の先生が週 2 回、日本語の新聞を翻訳してくれるという名目で訪ねて来ました。彼の趣味はギリシャ語でした。当時の日本の教育レベルの高さに感心しました。

しかし情報部ではひらがなばかりの命令書も読みました。思うに日本軍の上官には良い教育を受けていない人もいたようです。上官のほうが文字が書けない、という部隊もあったといいます。

戦後、急速に民主主義的思想が日本人の間に浸透していきました。あるときは「ゼネストをしたいのだが、許可をもらえるか」と礼儀正しく「スト伺い」をたてに来た労働組合まであったのには驚きました。

## 2) 笑いの重要性

当時は戦後のつらい時期でしたが、本当に日本人は良く笑っていたのですよ。笑いがとても重要でした。笑いが私の仕事を助けてくれました。笑いがあったからこそ仕事のできたのです。軍が撮った写真では人々はしゃちほこばっていますが、私が訪ねた村々は笑いに満ちていました。私は日本語ができたのでよく冗談を言い合って笑いあいました。

私は当時、かなり流暢に日本語を話したと思います。ところが語彙が狭かった。タック大佐からは丁寧な日本語を習いましたが、軍隊用語ですから、「本官」は知っていたのですが、「私」という言葉は民間人と会って初めて知りました。語彙が偏っていたので、花の名前は桜しか…。ああ、あと曼珠沙華。赤い花なら曼珠沙華～～、阿蘭陀屋敷に雨が降～る～～濡～れ～て～泣いて～る、じゃがたらお春～～…、えっ、知らないの？とてもはやっていた歌ですよ（「長崎物語歌」）。じゃあ、これはどう？「リングの唄」。みんな歌っていましたよ。赤いリングにくちび～るよ～せ～て～。こんな歌もありました。ラジオの英会話番組の歌。カム・カム・エブリバディ… ハブ・サム・キャンディ sweets ではないのですね、これが。candy は米語ですよ（わざと顔をしかめて見せる）。

下関で私は21歳になりました。そのお祝いに神戸へ宝塚を見に行く機会をもらった。今思い出しても笑ってしまいます。モンペ姿の女の子たちが「ヒー、ヒー」（日本語ではキャーキャー）と叫ぶ声が聞こえてくるようです。

演目のタイトルは忘れてしまった。非常に奇妙な話でした<sup>(10)</sup>。舞台はあるイギリス領の太平洋の島。そこである日本の娘がイギリス人兵士と身分違いの恋をする。結婚したいのにできず、大泣きする。ところが実際には貴族の子供だったということがわかりハッピーエンド。最後に娘が舞台中央に立ち「この人はりっぱな英国人です！」と大声で宣言する。すると見渡す限りのモンペ姿の女の子たちが「ヒー、ヒー」。一種の集団ヒステリー

ですね（笑）。その会場で男は私だけ、そして「英国人」は私だけでした。

困難な時お互いに笑いあえることは本当に大切です。あなたはまだ私のラブレターの英訳書を最後まで読んでいないでしょうけど、『ガリガンチュアとパンタグリュエル第四之書』のパビマンの個所を読むとわかります。キリスト教においては笑い laughter がいかに大事か、ということが<sup>(11)</sup>。

### 3) 売春婦の解放

日本では将来の仕事の方向性を決定づける経験もしました。ある時日本語ができる私達 6 人は 2 人一組で、売春婦たちに契約からの解放を通達する任務を受けました。一緒に任務遂行を命じられた同僚は大学で古典（ギリシャ語とラテン語）を勉強していて、私は彼にモリエールを、彼は私にキケロを互いに貸し借りする仲でした。

2 人で売春宿を明け方に訪ねて回り、まだ目覚めていない売春婦たちを起こして、彼女たちの権利の説明をしました。自分のお金を持って、もうここを出ていいのだと。ユーモアを交えて、できるだけやさしく話しかけました。直ぐにそこを脱出したい人たちの手伝いもしました。

しかし、うっすらと朝日が差し込んできた部屋でぐったりとしている彼女たちは、とてもではないですが魅力的とはいえず、下品な厚化粧は崩れ、疲れきった様子でした。ひどい悪臭のするその汚い施設、劣悪な衛生環境。その場を支配していた貧しさ、絶望感。まだ 20 才そこそこの青年たちに与えた影響は測り知れません。

帰りがけのジープの中で同僚がふと私に向かって、ラテン語でテレンティウスの『宦官』 *Eunuch* からの引用句をつぶやいたのです。

*Nosse omnia haec salus est adolescentulis.*

（「こうしたすべてを知ることは、若者にとって幸いである」<sup>(12)</sup>）

その句があまりに今、目の当たりにした風景とぴったりだったので、思わず互いに顔を見合わせてうなずいてしまいました。なんとも不思議な体

験でした。しかもこの異国の地で、この言葉の意味がわかるのは自分たち2人だけ。

その瞬間、私は自分の日本語が薄っぺらな言葉だったと気づいたのです。日本語に親しんで4年になろうとしていましたが、いちおうは言葉のやりとりはしてきたものの、その言葉の背景に広がる世界、言葉に託された思い、含意は理解できていなかったのではないかと。戦後出会った多くの教養ある日本人たちから私への言葉の中にはたとえば、近松作品からの言葉が一つ二つ、あるいは『古事記』からの適切な引用句などがあったのに、私はそれらの言葉を字句通りの意味にしか解釈しなかったのではないかと、頭を素通りしたのではないかと。なにしろ当時の私の語彙と言えば、ほぼ軍隊用語ばかりだったのですから。

さらに思いはラブレーに飛び、ラブレーの文章にもそのような引喩や仄めかしがあるのではないかと、急にひらめきました。

これは大変だと思いました。古典を勉強しなくては、ラテン語を勉強しなくては、と。ルネサンス期の人々は当時すでに名著となっていた本を読んでいた。モンテーニュはテレンティウスの文章をもじり、ルターはアウグスティヌスを、エラスムスはプラトンを引用している。彼らの言葉は古典古代の思想家の言葉と深く結びついている（Screech, 2008）。そして重要なのは当時の読者は解説なしにそれらの言葉遊び、引喩、仄めかしを行間から読み取っていたのです。私は帰国し大学に戻ってからは、当時のフランス識者たちが読んでいたであろう本を読み漁り始めました。

そして気づきました。その時代、最も読まれていた本というのは聖書だったのです。

その目でラブレーを読むとなんと多くの聖書からの引用があることか。ラテン語、そして聖書を知らずにはルネサンス文学は理解できない、と悟りました。

## (6) ヒロシマで想起するブリマスでの戦中生活

あなたはヒロシマを見たことがありますか。私は被爆したヒロシマの地に立ちました。破壊され尽くした土地.....。

実は、廃墟に立ったのはその時が初めてではありません。私はそのわずか数年前、ブリマスでドイツ軍によるブリッツで被災しています<sup>(13)</sup>。もちろん、ヒロシマの被害はそれとはまったく別次元の被害です。でも当時ブリマスに住んでいた私達にとっては、いつ終わるともしれない、断続的に最終的には4年間に渡った恐怖の日々でした。私達にとっての敵はナチス・ドイツでした。ロンドンでは子供たちを疎開させましたが、ブリマスでは当初、疎開させずに親たちが子供を手元から離さなかった。子供たちは正面から戦争に対峙したのです。大人と一緒に防空壕にも入りました。私の小さな弟は防空壕の中で感染症がもとで亡くなりました。

私は14,5歳でしたが、砂袋を掴み走って行って、落ちてきた爆弾の上に覆いかぶさって消火したこともあります。勇気があった、と大人は褒めてくれましたが、怖くはなかったですね。子供は死を恐れないものです。いまは恐ろしい(笑)。

日本ではアメリカ人とイギリス人をしばしば混同します。戦中、アメリカの本土は攻撃を受けなかった。しかしイギリスは違います。主要都市がすべてドイツの空爆を受けた直後でした。だから私達もまた被災者であり、日本の多くの都市が焦土と化したことに大いに同情的でした。

日本の戦後復興期においては軍部に対して、人々にはこのような被害をもたらし戦争に国民を巻き込んだことへの強烈な怒りがあった。別の方法で終わっていたらと思います。「一億玉砕」「切腹」などというのは、まったくもって理性的な戦略とは思えません。

もちろん「敵国」だったイギリスに対する怒りもあったでしょう。しかし、私や同僚たちは個人的に土地の人々からそのような怒りをぶつけられたことはほとんどなかった。BCOFのイギリス人たちが進駐した各地で



比較的友好的に受け入れられたとしたらそれは、戦争の悲惨さ、空襲に怯える日々を知っていたからだとも思います。お互いに被災者としてのつらさ、痛みを分かち合うことができたことも大きな要因ではなかったでしょうか。

ヒロシマの惨禍は人類にとっては二度とあってはならないことです。私が後に聖職者の道を選んだのもこの時の体験と無縁ではありません。そしてヒロシマはこのままで終わってはいけない、（日英関係は）このままで終わらせてはならない、とヒロシマの廃墟に立ったとき強く思いました。

帰国してからもその思いは変わらず、研究を通じて日本の友人たちと交流を持ち、彼らへの敬意と友情を育んできました<sup>(14)</sup>。3人の息子のうち1人が長じて日本研究に携わるようになり、僅かながらも日英交流に貢献できたのでは、と密かに思っております。

イギリスにとって日本は地理的には遠い国です。ユーラシア大陸のちょうど東と西。しかし、長い交流史を紐解くと全般的には良好な関係で、第二次世界大戦の間だけがむしろ異常な関係だったといえるのではないのでしょうか。

#### 4. 解 説

本稿の特徴として、第一に、当時無名の20歳のイギリス人青年の戦争体験であること。日本人にその体験談が直接語られる機会は希少である。そもそもイギリス人で進駐した兵士の人数はアメリカ人よりも少なく、また関西方面進駐であったこともあり公的記録も少ない。その後日英外交・経済関係に寄与した元BCOFの伝記や自伝は幾つか出版されている（Nish (ed.) 1994、大庭 1988、Cortazzi 1998、Cortazzi (ed.) 2005 等）。しかし、彼らのようにその後も継続的に日本と関わりを持った元兵士は多くはない。その意味でスクリーチの語りは、一人の「普通」のイギリス人

青年兵士の進駐体験談である。

詳細に語られた英国情報部での日本語コースの授業、また日本での駐留経験の話の内容そのものが戦時中のオーラル・ヒストリーとして興味深い史料となっている。特に彼の語りには日本の戦後復興時の様子を描写しつつ、自身がイギリス本国で経験した戦中生活・被災体験が常に通低音のように流れていたのは大きな発見であった。

第二に、スクリーチの語りには彼の長年の研究対象であるフランソワ・ラブレーの影響が伺われる。そしてそのラブレー研究へと彼が導かれたのが日本での経験であったことは、一人の人間の成長過程をたどる意味でも興味深い。元大学教授というイギリス知識人層に属する人物が、笑いをちりばめながら、20歳の時の視点と現在84歳で当時を回顧している視点とを意識的に使い分けて話している点にも注目したい。

今後はさらに時代背景に関する調査を加え、異文化接触論の観点から別稿で論文に起こす予定である。

[注]

- (1) BCOF (British Commonwealth Occupation Force) : 1946年から1952年まで、第二次世界大戦後に駐在したイギリス軍、オーストラリア軍、ニュージーランド軍、イギリス領インド軍から構成されたイギリス連邦軍を指す。広島県呉市に本部を置き、主に西日本において任務を展開した。大きな撤退が始まる直前の1946年12月31日にはその兵力は最盛期に達しており、37,021名が駐在していたと記録されている。派遣国別では、オーストラリア32.2%、インド29.3%、イギリス26.5%、ニュージーランド12%。ただし、イギリス軍の9,806名には、イギリスが経費を負担したインド人が2,533名含まれていた。ゆえに実質的にはインド人兵士が最も多かった。英師団を編成したイギリスとインドで20,659名56%。海軍を派遣したのはイギリスのみで、空軍の割合はイギリスとオーストラリアが高かった (Strength of BCOF, 4/1948. British Commonwealth Occupation Force Reduction of the Australian Contingent of BCOF, 4/1948. British Commonwealth Occupation Force Reduction of the Australian Contingent (AAA: CRS A 816), 千田、1997 : 167)。

当然のことながら、文中における日本進駐の体験やコメントはスクリーチ個人の体験・コメントであり、当時日本駐在を経験した元 BCOF 兵士全員の意見を代表するものではない。

- (2) SOAS (School of Oriental and Asian Studies, University of London, ロンドン大学アジア・アフリカ研究院) はロンドン大学のうちの1校。アジア・アフリカ地域研究、言語研究で世界的に有名である。1916年に設立され現在10学科3,700名の学部生が在籍。約30%が留学生。通信教育でも世界中で1000名以上が学んでいる。戦中は情報部から語学要員養成も委託された（大庭1988）。
- (3) プリマス (Plymouth)：イングランド南西部デヴォン州にある港湾都市。現在の人口約25万人（2007）古くから貿易港、軍港として栄え、現在もイギリス海軍の重要な軍港。1588年、スペインの無敵艦隊と対決すべく、フランシス・ドレイクらが率いるイギリス海軍が出航、凱旋。1620年にはピューリタンが新大陸を目指して出帆した港としても知られる。
- (4) ダンケルクからの撤退 (The Dunkirk evacuation)：「ダイナモ作戦 (Operation Dynamo)」とも言われる。1940年5月24日から6月4日、ドイツ軍の北フランス侵攻に伴い、イギリスのW.チャーチル首相はイギリス大陸派遣軍とフランス軍合計35万人を救出すべく、軍艦のみでなく民間の漁船、ヨットすべての船を総動員させた大撤退作戦。実際は軍艦が8割の兵士を運送したと言われるが、民間が協力したことが大々的に宣伝され、その後、イギリスが拳国一致でことに当たる時には現在に至るまで「ダンケルクの精神 (Dunkirk Spirit)」が標語として好んで使用される。
- (5) ブレッチリー・パーク (Bletchley Park)：第二次世界大戦中、イギリスの暗号解読、情報傍受の機関が置かれた。設立当初から主にドイツ軍の暗号解読が活動の中心であったが、戦争の後半には日本語で情報収集ができる人材育成に力を入れる。GCCS (Government Code & Cypher School 政府暗号学校) は当初、SOASに人材養成を依頼したが、一人前の人材を育成するには5年間かかる、といわれた。ジョン・ティルマン (John Tiltman) 准将はブレッチリー・パークの暗号解読者の中心的存在だったが独学で日本語を学び、6カ月で日本の陸軍の暗号を解読した。その後SOASには圧力がかかり2-3年コースをGCCSに提供した。ティルマン准将はそれに満足せず、独自にコースを提供することにした。彼は一度は退官した海軍出身のオズワルド・タック (Oswald Tuck) 大佐を呼び戻し、コースを手伝わせた。タックはすでに日本語を40年間教えており、優れた教師だった。ティルマンが早急に人材養成を

する必要があることを告げると、タックは6カ月コースを実施することを了解した。このコースで、スクリーチ氏はタックに日本語を習ったのである。

1941年のパールハーバー爆撃以降、日本語のできる人材不足が言われるようになり、それまでドイツ語解読が中心だったのだが日本語暗号解読要員育成が注目される。まずオックスフォード大、ケンブリッジ大に入学可能な学力のあるハイスクールの6年生が呼ばれた。必ずしも全員がスクリーチのように与えられた任務に好奇心を持って取り組んだわけではないようだ。「長時間に渡る徒労の時間を過ごした」(Michael Loewe)「暗号群を分類するにあたり、フラストレーションを感じた。なぜなら私達は千字も漢字を覚えたのに、目の前にあるページにはそのような漢字はみあたらなかった。それは私達が古い辞書で漢字を習ったからであった」(Maurice Wiles) (McKay, 2010: 183-184)

- (6) 「情報部隊 (The Intelligent Corps)」: 「私が最初に所属した部隊は 583FSS (583 [British/Indian] Field Security Service) で、インドが独立した後は 904 [British] FSS でした。FSS Unit は日本語では通常「特務情報部隊」と訳されますが、それは少し大げさな言い方で、英語では単に Intelligence Units (= 情報部隊) と呼んでいました。「特務」という言葉はいつも面白いと思っていました。実際の私達の日本での仕事は、ほぼ毎日決まり切った仕事だったからです。」(スクリーチ談)
- (7) ベッドフォード (Bedford): イングランド北部ウェスト・ヨークシャー州の都市。人口約 29 万人。この地に第二次世界大戦中、日本語暗号解読のために日本語学校が設置された。ここでオズワルド・タック大佐を中心に6カ月の日本語集中コースを11コースが開講された。このコースは非常に効率良く、成功し、第1回生が戻ってきて後輩を教えるなど、独自の教授方法を実施した。その後、SOASでも1-2年の日本語コースを開講した。Bletchley Park Jewels Japanese Code School, <http://www.mkheritage.co.uk/japedsch3.html>。
- (8) Rose-Innes, Arthur(ed.), Beginner's Dictionary of Chinese-Japanese Characters, Harvard University Press, 1942. 5,000字の頻用漢字を掲載し、長らく欧米の日本語学習者に重用されてきた。
- (9) 鳥取地震。1943年9月10日に発生した地震。鳥取県気高郡豊実村(現鳥取市)でマグニチュード7.2。鳥取市で震度6。1,083人の死者、7485戸が全壊するなどの被害が出た。鳥取地震の後、東南海地震(1944年12月)、三河地震(1945年1月)、南海地震(1946年12月)と4年連続して各1,000人以上の死者を出し、終戦前後の4大地震と呼ばれた。
- (10) スクリーチがいうのはおそらく「南の哀愁」という作品のようだ。

彼の思い違いは、イギリス人青年が恋に落ちるナイアという女性は日本人の娘ではなく、タヒチ島の娘という設定であった。またスクリーチが明瞭に日本語で記憶している「この人はりっぱな英国人です」というセリフは、当時の脚本を調べたところ、確かにその通りに存在していた。これはナイアが現地の娘だと思われていたのが、実はイギリス人だった、という場面であった。

以下、あらすじ。

「タヒチを舞台にした甘く切ないラブ・ロマンス。'47年、春日野八千代と乙羽信子のコンビで初作作品。南太平洋のタヒチ島の港でイギリス領事ブレーアは、イギリス人青年ジョンと彼の親友ヘンリーと出会う。ジョンはブレーアの親友の息子で、有望な画家だったが眼を痛め、静養のためにタヒチに来ていた。そして、ジョンはヘンリーの亡き母の話し相手だったモーレア島の地主テフラ夫人宅で静養することになり、そこで娘のナイアと愛しあうようになる。これを知ったテフラは、一人娘がイギリスに連れ去られることを恐れ、占術師オウラを訪ねるが、オウラは二人の愛が悲劇に終わると占う。やがてジョンの視力は日ごとに薄れ、彼は一旦は島を去るが、再び戻ってくる。イギリスで結婚を反対され、全てを捨てタヒチへの永住を決意してのことだった。そしてナイアと結婚식을挙げ、幸せな生活を送るが、日々視力は失われていき、愛するナイアの姿も見えなくなっていくのだった。」

<http://www.skystage.net/Prgm/Detail/1002.html>

- (11) パピマンの話： *The Fourth Book of Pantagruel*, Chap XLVIII How Pantagruel went alone at the Island of Papiman (trans. by Screech, 2006) の章について話している。2度目のインタビューの時期がちょうど、ローマ教皇の英国初公式訪問がマスコミで取りざたされている時期であった。
- (12) マイケル・A. スクリーチ著、平野隆文訳、『ラブレール 笑いと叡智のルネサンス』、白水社、2009年、「日本語版への序文」p. 14-15 参照。
- (13) ブリッツ (The Blitz)：1940年6月6日から1941年5月10日まで、ドイツ軍のイギリス主要都市に対する継続的な大空襲を指す。ロンドンへの連続57日間の夜間空襲から始まり、バーミンガム、リバプール、プリマス、マンチェスターなど主要都市も空襲を受けた。合計約43,000人に民間人が死亡、100万軒以上の建物が被害を受けた。その後も小規模な空襲は続き、5万人以上の民間人が死亡。プリマスでは空爆は1944年4月30日まで続いた。バトル・オブ・ブリテンでイギリス軍が防戦し、辛くもドイツ軍による本土侵略を防いだ。その後イギリス軍は報復攻撃をかけ、ベルリン・ドレスデン等のドイツ諸都市へ

の大々的な空襲を実施した (Mitchell 2010, Mortimer 2010)。

- (14) スクリーチは戦後、イギリスからフランスへの戦後最初の留学生としてパリ大学へ留学した時に、日本からの最初の留学生として派遣された故秋山光和氏と交流を持つ。その後、故渡辺一夫氏、荒木昭太郎氏等日本の仏文学者たちとも長年の交流を持つこととなる。

秋山光和著、『出会いのコラージュ 秋山光和随想集』講談社、1994 年、pp 47-50 参照。

マイケル・A. スクリーチ著、荒木昭太郎訳、『モンテーニュとメランコリー』、みすず書房、1996 年、pp. 317-322 参照。マイケル・A. スクリーチ著、平野隆文訳、前掲書、pp. 19-21 参照。

# [引用・参考文献]

Aldridge, Wilfred (ed) 旧 BOCF で関西方面に駐留した元英軍兵士達へのアンケート回答、約 300 通 (未発表原稿)

Arscott, David 2010 *Rations: A very peculiar history with NO added butter*, Book House, Great Britain.

秋山光和著 1994 『出会いのコラージュ 秋山光和随想集』講談社

Bates, Peter 1993 *Japan and The British Commonwealth Occupation Force 1946-52*, Brassey's.

Buckley, Roger 1994 'Split Images: Occupied Japan through the Eyes of British Journalists and Authors', Nish, Ian (ed.) 1994 *Britain and Japan Biographical Portraits*, Japan Society Paperback .

千田武志著 1997 『英連邦軍の日本進駐と展開』、お茶ノ水書房

Cortazzi, Hugh 1998 *Japan and Back and Places Elsewhere*, Global Oriental

Cortazzi, Hugh (ed.) 2005 *Britain and Japan Biographical Portraits vol. 5*, Global Oriental

ダワー、ジョン著、三浦陽一・高杉忠明訳 2004 『増補版 敗北を抱きしめて 第二次大戦後の日本人 上』 岩波書店、Dower, John W., 1999 *Embracing Defeat*, Norton.

ダワー、ジョン著、三浦陽一・高杉忠明・田代泰子訳 2004 『増補版 敗北を抱きしめて 第二次大戦後の日本人 下』 岩波書店、Dower, John W., 1999 *Embracing Defeat*, Norton.

Gardiner, Juliet 2009 *The Thirties: An Intimate History*, Harper Press.

Garfield, Simon 2005 *We are at War: The remarkable diaries of five ordinary*

- people in extraordinary times*, Ebury Press.
- Hinsley, F. H. & Stripp, Alan 1993 *Codebreakers: The Inside Story of Bletchley Park*, Oxford University Press.
- Jarvis, Sue, 'Captain Oswald Tuck RN (1876-1950) and the Bedford Japanese School', Cortazzi, Hugh (ed.) 2005 *Britain and Japan Biographical Portraits vol.5*, Global Oriental, pp.196-208.
- Kynaston, David 2007 *Austerity Britain 1945-51*, Bloomsbury
- Kynaston, David 2009 *Family Britain 1951-57*, Bloomsbury
- McKay, Sinclair 2010 *The Secret Life of Bletchley Park: The WWII Code-breaking Centre and the Men & Women who worked there*, Aurum
- 御厨貴編 2007 『オーラル・ヒストリー入門』 岩波書店
- Ministry of Information 2010 *The British Home Front Pocket-Book 1940-1942*, Conway, London.
- Mitchell, Jaqueline (Compiled by) 2010 *Blitz Spirit*, Osprey Publishing, Great Britain.
- Montaigne, Michel de, translated by Screech, M. A. 2004 (first published in 1987) *The Essays: A Selection*, Penguin Classics, London.
- Mortimer, Gavin 2010 *The Blitz: An illustrated history*, Osprey Publishing, Great Britain.
- Nicolson, Harold 2010 (first published in 1939) *Why Britain is at War*, Penguin Books, London.
- 大庭定男著 1988 『戦中ロンドン日本語学校』 中公新書 868 中央公論社
- スクリーチ, マイケル A. 著, 荒木昭太郎訳, 1996 『モンテーニュとメランコリー』 みすず書房、Screech, M. A., 1983 *Montaigne and Melancholy: The Wisdoms of Essays*, Duckworth, London.
- Screech, Michael 2008 'Montaigne and a quip from Terence' *Mythes et réalités du XVI<sup>e</sup> siècle Fois, Idées, Imagies, Études en L'honneur d'Alain Dufour*, éditées par Bernard Lescaze et Mario Turchetti, Edizioni dell'Orso, Italy: 121-126
- スクリーチ, マイケル A. 著, 平野隆文訳 2009 『ラブレール 笑いと叡智のルネサンス』 白水社、Screech, M. A., 1979 *Rabelais*, Duckworth, London.
- Rabelais, François, translated by Screech, M. A., 2006 *Gargantua and Pantagruel*, Penguin Classics, London.
- Smith, Michael 2000 *The Emperor's Codes: Bletchley Park's role in breaking*

*Japan's secret cyphers* Bantam, London.